

はじめに

有明海は、我が国のノリ漁業や二枚貝漁業において重要な地位を占めているが、アサリ等の二枚貝資源は近年減少しており、その原因として底質の泥化、底層水の貧酸素化等の底質環境の変化が指摘されている。また、平成14年に制定された「有明海及び八代海を再生するための特別措置法」により設置された「有明海・八代海総合調査評価委員会」は、有明海の再生に係る評価を行い、報告書を取りまとめ、平成29年3月31日付けで、農林水産大臣等関係主務大臣等に提出したところである。

このような背景から、水産庁では平成17年度から平成19年度まで、有明海漁場環境改善事業を実施し、アサリ、サルボウガイを主な対象にし、効率的な二枚貝漁場造成に資するため、通常の覆砂とは異なる基質供給技術について実証実験を行った。また、貧酸素水塊によるサルボウ、カキのへい死抑制技術についても実証的な検討を行った。これらの実証実験を通じて、技術開発についての有効性や課題、並びに実証海域の地域特性などについて明らかにしてきた。

上記事業の成果を受けて平成20年度から平成24年度まで実施された有明海漁場造成技術開発委託事業では、さらなる技術開発を進めるべく、覆砂漁場造成等の技術開発が各実験漁場にもたらす環境改善効果と、アサリ等二枚貝の生残への効果について調査を行ってきた。加えて平成24年度は、事業成果の普及を図るため、「二枚貝漁場環境改善技術導入のためのガイドライン」（別冊）を作成した。

平成23年に改正・延長された「有明海及び八代海等を再生するための特別措置に関する法律」においても、海域環境の保全、改善のための調査や、その成果の普及を行うこととしている。これを踏まえ、平成25年度から平成29年度まで実施された「各地域の特性に応じた有明海の漁場環境改善実証事業」においては、有明海沿岸各地の様々な特性に対応し、漁業者等が漁船や漁具等も活用して実施することができる効率的な漁場環境の維持・改善のための技術開発・実証を行ってきた。

最終年度の平成29年度は、過年度（平成25年度から）の成果を整理し、効果評価や利用条件による有効性についても取りまとめた。加えて、事業成果の普及を図るため、「アサリ漁場環境改善技術導入のための作業手引き」（別冊）を作成した。

平成30年度より「有明海のアサリ等の生産性向上実証事業」が実施され、4年目に当たる今年度は上記委員会報告の再生方策を踏まえつつ、「有明海のアサリ等の生産性向上実証事業のうちアサリ母貝生息適地造成技術開発及び貧酸素水塊軽減技術開発事業」において、母貝生息適地の造成技術開発とカキ礁の造成による貧酸素水塊の軽減技術開発を実施し、また、「有明海のアサリ等の生産性向上実証事業のうち基質入り網袋、カゴ等を用いた稚貝育成技術開発及びアサリ稚貝の高密度着生・集積域からの移植技術開発事業」において、稚貝育成技術開発と移植技術開発を実施した成果から、「有明海のアサリ等の生産性向上実証事業のうち技術検討・評価・普及等事業」で各漁場のアサリ等の生産性向上のための技術開発およびその実証事業として、とりまとめを行った。

当報告書は「有明海のアサリ等の生産性向上実証事業のうちアサリ母貝生息適地造成技術開発及び貧酸素水塊軽減技術開発事業」についてとりまとめた報告書になる。

有明海においてアサリ等の生産性向上技術を導入する際、本事業の成果がその一助となることを願う次第である。

